

## 『私のアントニア』における道と鉄道

酒 井 三 千 穂

### 1章 作品の背景

ウイラ・キャザー (Willa Cather, 1873-1947) の4作目の小説『私のアントニア』(My *Antonia*) (1918) は「横断の物語 (great novel of crossing)」(Urgo 55) とされている。作品の枠組にあたる「イントロダクション」は、アイオワ州を横断する汽車からの景色の印象的な描写で始まっている。作者キャザーと思われる「わたし」が、ネブラスカ州とともに育ち、今はニューヨーク在住の鉄道会社の顧問弁護士ジム・バーデン (Jim Burden) と同じ汽車に乗り合わせ、彼らの幼なじみであるボヘミアからの移民の娘アントニア (Antonia) について語り合う。その後、ジムが「わたし」に届けた、アントニアについての回想録、というのがこの作品の設定である。回想録は、「彼女の名前が自分に思い起こさせることを全部書き留めていっただけ (I simply wrote down pretty much all that her name recalls to me.)」(4) なので、ジムの生活が中心であり、彼から見たアントニアについて書かれている。時代背景は、ジムを作者の自伝的人物と考えれば、キャザーが家族と共にネブラスカ州に移住した1883年頃から1910年代半ばのおよそ30年余りと考えられる。この論文では、作品中の道と鉄道に注目して、ジムが、どうして鉄道会社の顧問弁護士になったのか、を考えたい。

ジムの経歴で特徴的なのは、成長するにつれて彼の生活の場が移動していくことである。第1部の冒頭では、それまで暮らしていたヴァージニア州から、祖父母の住むネブラスカ州へと向かう「普通客車 (day-coaches)」(7) による汽車の旅について述べられている。当時、両親をなくしたばかりの10歳のジムと、「移民列車 (the immigrant car)」(7) に乗っていた4歳年上のアン

トニアとその家族との直接の出会い、この旅が終わる駅でのことであった。2人は同じ駅に到着するが、ジムは祖父母の農場へ、アントニアとその家族は開拓地へ、とそれぞれ異なる環境で生活を始める。アメリカで最初に植民地づくりがされたヴァージニア州から、1867年に州となって10数年しか経過していないネブラスカ州への、孤児となつての移動は、いわば歴史を逆行し出発点に戻る旅とも言えよう。

しかし、3年間の農場での生活の後、今度は都会へ向かって、彼は逆方向の移動を始める。すなわち、第2部では、小さなフロンティア・タウンであるブラック・ホークへの移動と17歳になるまでの4年間の生活が、第3部では、州都リンカーンにおける19歳になるまでのおよそ2年間の大学生活が述べられる。第2部において、アントニアはジムから少し遅れてブラック・ホークに移り住むが、その理由は町の名家ハーリング家で奉公するためであり、第3部では、彼女は直接登場することはない。第4部の冒頭ではジムがリンカーンを去り、ハーヴァード大学での学業を終えたことが記されているが、ここでの中心は、ロー・スクール入学前の夏休みに故郷に戻り、結婚するつもりであった男から捨てられたアントニアと再会する話である。第5部では、第4部から20年後、40歳代初めのジムと、今や大家族の母となった44歳のアントニアとの再会が中心になっている。

第2部から第4部までの冒頭はすべて、ジムの教育のための移動について述べられている。第5部では、弁護士となった彼の顔写真がシカゴの新聞に載せられていたことや、アメリカ国内だけではなくロンドンやウィーンにも旅行をしたことがあると示されているので、職業人としては彼は成功したと言えるだろう。『ハックルベリー・フィンの冒険』(*Adventures of Huckleberry Finn*, 1885) や『ライ麦畑でつかまえて』(*The Catcher in the Rye*, 1951) をあげるまでもなく、旅をはじめとする移動の物語はアメリカ文学作品においてよく利用される枠組みだが、ジムの半生を見る限り、よりよい教育を受けるための移動が彼の成功に必要なものであったばかりでなく、仕事のための西部への旅は、今の生活の一部にもなっているから、移動と彼の人生は切り離せないと考えられる。

キャザーの人生も移動の連続だった。孤児となつたジムとは異なり、家族あ

げての移動であったが、一家は、1883年、キャザーが9歳の時に、一足先に移住した祖父母の農場へと、ヴァージニア州からネブラスカ州に移住している。その後、祖父母の農場からブラック・ホークのモデルとなった町レッド・クラウドへ、レッド・クラウドからリンカーンのネブラスカ大学へ、卒業後は、仕事のためにピッツバーグからニューヨークへ、と単純に言えば、キャザーの生活の場も、教育や仕事のために、ジムと同じように田舎から都会へと向かっていた。地方主義作家として知られる彼女だが、「ニューヨークは、彼女が選んだ人生で最も中心的な場 (...New York was the place most central to the life Cather chose for herself.)」であり、1906年から1947年に亡くなるまで、その住まいが置かれていた (Skaggs 13-14)。さらに、第1作目の『アレクサンダーの橋』(*Alexander's Bridge*, 1912) では橋が、第6作目の『教授の家』(*The Professor's House*, 1925) では飛行機用のジェット・エンジン (トム・アウトランド・エンジン) が重要な役割を果たしていることから、移動のための交通手段の発達へのキャザーの個人的な関心を読み取ることができるが、「移動は、ビクトリア時代アメリカを特徴づける (Migration and movement, mobility and motion characterized identity in Victorian America.)」 (Schlereth 7) ものとして、当時の社会の様々な場面で見られたのである。

たえず拡張を続けてきたアメリカ史において、南北戦争以後、特に顕著に見られたのは、様々な交通網の発達である。ホイットマン (Walt Whitman, 1819-92) は *Passage to India* (1871) の中で、スエズ運河の開通、鉄道網、電線網等々の "Our modern wonders" (Whitman 411) を歌い上げる。彼によれば、技術革新により、人々は地球的な規模で互いに移動し、つながり合うことが可能になったのである。移動手段が高度になると同時に、アメリカは国外へもその力を広げていく。南北戦争において、北部の勝利により国内の分裂を防いだアメリカは、1898年には米西戦争 (the Spanish-American War) でキューバ独立をめぐるスペインに開戦、1917年には第一次世界大戦参戦、1941年には第二次世界大戦参戦へと、国外的にも存在感を高めていくのである。皮肉にも、ホイットマンの述べる地球的な規模の人々の移動の一部は、戦争という形で実現していくに至った。南北戦争終結の8年後に生まれたキャザー

の生涯も、このようなアメリカの拡張時代とほぼ重なる。

『私のアントニア』の背景として、もう一つ確認しておかなければならないのは、当時のアメリカ西部開拓の状況である。国内的には、1862年ホームステッド法 (Homestead Act) 成立により、アメリカ人だけでなく、ヨーロッパその他の地域からの移民の西部への定住が促進され、その結果、1890年にはフロンティア・ラインの消滅が宣言されることとなった。一方で、その3年前の1887年には、先住民であるインディアンの伝統的な土地共有制を解体し、彼らのアメリカ社会への同化を意図したドーズ一般土地割当法 (Dawes General Allotment Act) が成立し、インディアンの数はさらに減少していく。作者の自伝的人物ジムの少年期から青年期は、このように、西部開拓の最終段階とも言える時期だったのである。

西部における移民の流入とインディアンの消滅という同時進行の出来事に、大きな役割を果たしたのは鉄道であった (Stout 159)。「イントロダクション」において「わたし」とジムが共に乗った汽車は、どこまでも続く西部の土地を、次のように疾走する。

While the train flashed through never-ending miles of ripe wheat, by country towns and bright-flowered pastures and oak groves wilting in the sun, we sat in the observation car, where the woodwork was hot to the touch and red dust lay deep over everything. (3)

「空間を短縮する鉄道の速度は、それぞれの独自性のために全く異なる領域に属する光景や対象を直接結びつけて、次々にそれを披露する」(シヴェルブシュ 78) ことを考えれば、次々に繰り広げられる断片的な景色—豊かな小麦、田舎町、明るい色の花で覆われた牧草地、オークの小さな森—は、展望車の窓から見るものにとっては、ひとつに連なり、全体としては、人の手によって文明化された荒野を示す。鉄道が走るということは、人が広大な荒野をその手の中に入れたことを意味するのである。以上のような背景を考えれば、鉄道会社の顧問弁護士となるという生き方は、当時のアメリカの進む方向に沿った選択だったということが、この作品の「イントロダクション」ですでに明らかにされている。そのような選択に至るまでジムがどのような生き方をしたのか、を以下

の章で考えていきたい。

## 2章 道の意味するもの

第1部は、1年の内に両親を亡くした10歳のジムが、父の農場で働いていたジェイク・マーポール (Jake Marpole) に付き添われ、ネブラスカ州の祖父母の農場へと、鉄道の旅に出る場面から始まる。ジムにとって、彼らの目的地は「新世界 (a new world)」(7) であり、車中で買ってもらった本『ジェシー・ジェイムズの生涯』(*Life of Jesse James*) を夢中になって読むことからわかるように、この時の彼は目的地について漠然とした知識とイメージしか持っていない。それに対して、親切な車掌は、遠くの州や都市の名前を無造作に口に、「ほとんどあらゆる場所に行ったことのある経験豊かで世間を知った人 (an experienced and worldly man who had been almost everywhere)」(7) とジムには思える。鉄道は、「大きな世界への接近を約束するもの (the promise of access to the great world)」(Meyering 63) として、まず登場するのである。

しかし、長い旅の終わりにブラック・ホークの駅に到着したジムは、「大きな世界」とは逆の方向へ、すなわち駅から20マイル離れた祖父母の農場へと農場用の荷馬車で連れていかれる。この時、夜の闇を通して見える土地の様子は次のように述べられている。

There seemed to be nothing to see; no fences, no creeks or trees, no hills or fields. If there was a road, I could not make it out in the faint starlight. There was nothing but land: not a country at all, but the material out of which countries are made. (9)

人の痕跡を示すような柵もクリークも木も丘も畑もなく、土地以外には何もない、と否定語を重ねた描写は、17世紀初期のピルグリム・ファーザーズの1人で、プリマス植民地の総督にもなったウィリアム・ブラッドフォード (William Bradford, 1590-1657) の記したアメリカの姿を思い起こさせる。広大な海を越えてきたところで、彼らが直面したのは、次のように、迎えてくれる友もなく、風雨に打たれた体を慰め、元気を回復させるための宿も、助け

を求めると家やまして町もない土地だった。“...they had now no friends to welcome them nor inns to entertain or refresh their weatherbeaten bodies; no houses or much less towns to repair to, to seek for succor.” (Bradford 30-31) そのような新世界に直面した移住者たちが、それでも植民地を建設し、アメリカという国を作ったように、第1部では、開拓地を切り開き、土地にその痕跡を残そうとする人々の姿が描かれる。つまり、少年時代のジムがこれから目撃するのは、この時はかすかな星明りの下ではほとんど見えなかった道 (a road) が、開拓地にはっきりと刻まれていく過程なのである。

アメリカにおける交通機関の機械化は、「ヨーロッパのように伝統的風景の破壊とは見なされず、それまで行けなかったために無価値と見なされていた曠野を、文明化した地方にするものとして歓迎される。」(シヴェルブシュ 115) と述べられているように、肯定的な面を持っていた。それは、広大な土地が、短期間のあいだに発展、産業化する過程で、機械の力は、「国の統一の道具 (an instrument of national unity)」(Marx 234) として、必要不可欠であり、「風景の中に力強く効率的な機械を見ることは現在が過去よりも優れていることを知ることだった (To see a powerful, efficient machine in the landscape is to know the superiority of the present to the past.)」(Marx 192) からである。

このような鉄道の力がまだ及ばない開拓地に、道 (a road) はどのように刻まれていったのか。その過程について述べる前に、もう1箇所、鉄道に関わる興味深い描写を見ておかなければならない。見慣れぬ土地に着いて間もないジムが、祖父母の家の周辺を見回した時、彼はあたり一面の大草原の様子に「動き (so much motion)」(13) を感じる。さらに、次の引用文に示されているように、目の前の風景に動きを感じる理由を、ジムは長い鉄道の旅の移動の感覚がまだ残っているせいだと考える。そして、ゆったりとした皮のような草の下には野生のバッファローの群れが疾走しつづけていると空想する。

Perhaps the glide of long railway travel was still with me, for more than anything else I felt motion in the landscape; in the fresh, easy-blowing morning wind, and in the earth itself, as if the shaggy

grass were a sort of loose hide, and underneath it herds of wild buffalo were galloping, galloping.... (14)

第1部では、「大都市の貧しい人々 (the poor and destitute in great cities) (51) のための祖父の祈り、第2部では、社会から脱落した結果、浮浪者となり、脱穀機に自ら飛び込んで切り刻まれて死んだ男の話 (104) などが紹介されていることから、都市や機械の否定的な側面は、この作品の時代背景として意識されているのは間違いない。しかし、この時のジムによって、鉄道は、都市や機械ではなく、「動き」(motion) という共通点のために自然の風景や動物と結びつけられている。

このような結びつけ方は、一見、奇妙に見えるが、Marx は、ソーローの (Henry David Thoreau, 1817-1862) の描く「汽車の持つ二重のイメージ (this double image of the railroad)」を指摘する。ソーローによれば、最初は、「ウズラやタカのように、風景に溶け込んで見えた汽車 (First it is like a partridge, then a hawk; first it blends into the landscape)」が近づくにつれて、「耳障りな機械 (the discordant machine)」へと変わっていくのである (Marx 251)。また、ノリス (Frank Norris, 1870-1902) の *The Octopus* (1901) では、土地の至る所に伸びている鉄道が蛸にたとえられていることから、鉄道を自然の風景や動物と結びつけるのは、キャザーに特有のものというわけではないことがわかる。

ただ、この作品において特徴的なのは、「動き」(motion) への強い関心が、登場人物の生き方によっても示されていることである。すなわち、死んだ人間は動きを止めるし、動きを止めたら人間は死ぬことが、アントニアの父親シメルダ氏 (Mr Shimerda) の自殺と、ウクライナの村からの移民ピーター (Peter) とパーヴェル (Pavel) の物語において、明らかにされている。

シメルダ氏は、「アメリカは大きな国だから、大金が手に入る。息子たちには土地が、娘たちには夫が手に入る (America big country; much money, much land for my boys, much husband for my girls.)」(54) という妻に促され、ボヘミアからアメリカに渡ってくるのだが、ニューヨークでの両替とネブラスカ州への汽車賃で予想以上の費用を費やし、到着後は土地や牛馬、農機

具の支払いのために、ほとんど無一文になってしまう。そして、開拓地の厳しい冬を過ごすには、「土手にあけた穴 (that hole in the bank) (43) や「洞窟 (the cave)」(45) と呼ばれる住まいで、家族が「あなぐま (badgers)」(43) のように身を寄せ合って暮らすしかない生活に絶望して、ジムの11歳の誕生日の2日後に、銃で自殺した死体となって発見される。死体は、「凍らせるために外につるした羽根を抜かれた七面鳥のように、すっかり凍って固まり (The dead man was frozen through, "just as stiff as a dressed turkey you hang out to freeze,...")」(60)、「地面に凍りついた血溜まりから死体を切り離さなければならない (cut the body loose from the pool of blood in which it was frozen fast to the ground) (67) ほどであった。移住先でも、故国に心を寄せ続けていたシメルダ氏が、ここで固まった動かない死体となり、アメリカの土に凍りついてしまったことは皮肉だが、死んだ人間は動きを止めて固まってしまうことは、少年のジムの記憶に刻まれたに違いない。彼の遺体は、妻と長男の望みで、家族の土地の南西の隅に埋葬される。後に、そのあたり一帯の赤い草が刈り取られ、周囲を道 (roads) が走り、土地の様子がすっかり変貌しても、彼の墓が変わらず同じ場所にあり続ける、とされるのは、動いていく周囲に対して、そこで動くことを止めてしまったシメルダ氏の不動性を、さらに強調するものと言えよう。

開拓地の移民の中でも、「とても変わり者で超然としている (the strangest and the most aloof)」(23) ピーターとパーヴェルの物語は、シメルダ氏のように死なないためには、人間は動きつづけなければならないことを示している。すなわち、結婚式の祝いの夜に、花婿、花嫁や参列者と共に乗った橇が飢えた狼達に追いかけられた時、2人は、橇を少しでも速く走らせるために、同乗の人々を次々に橇から落とし、ついには、花嫁までも狼の餌食として自分たちだけは生き延びるのである。その結果、故郷では暮らせなくなり、彼らは居場所を求めて、アメリカに渡ってくる。この作品を、ジムの性への恐れを扱ったものと解釈する Gelfant は、この話の意味を「男にとって本当に危険なのは女 (the real danger to man is woman)」であることを示す例と見なし、「違ったふうには説明がつかないエピソード (otherwise unaccountable episode in

My Antonia)」(Gelfant 91) と述べている。しかし、シメルダ氏の自殺と関連づければ、彼らの物語は、櫛で走り続けなければ人は死ぬことを、言い換えれば、動きを止めた者は死ぬことを、異なる角度からジムに示したものと理解できる。

第1部の背景となる開拓地では、「土地全体が走っているように見える (...the whole country seemed, somehow, to be running.)」(13) だけではなく、道 (the road) もまた、「野生動物のように、深い箇所は避け、広く浅くなった所でみぞを横切り、走っている (The road ran about like a wild thing, avoiding the deep draws, crossing them where they were wide and shallow.)」(16) と、動いているように見える。しかし、自然の地形に沿って曲がりくねって走っていることからわかるように、第1部における道は、自然の圧倒的な力の前では、簡単に打ち負かされて消えてしまうほどのかすかな痕跡でしかないことが、特に、厳しい冬の間の生活の描写によって強調されている。

ジムの祖父母の家の周囲では、道は、6マイル離れたところにある郵便局から家の戸口にまっすぐに伸び、農地を横切り、小さな池のところを曲がって、西の方へとなだらかな丘を上っている。しかし、このような道でさえ大雪が降ると消されてしまい、クリスマスの買物のために町まで行くことが、まずできなくなる。さらに雪が降り続けると、納屋や鶏小屋までの道をシャベルで掘ったり、雪のトンネルを作ったりと、生活そのものが不便になる。そのような季節の冬のあいだに実行されたシメルダ氏の自殺は、圧倒的な雪の中では身動きがつかないことを、あらためて人々に思い知らせる。20マイル離れたブラック・ホークの町から検視官がやって来るのに数日はかかるため、それまで遺体を動かすことができないし、1日ばかりで道を切り開かなければ、遺体を運ぶための荷馬車を走らせることもできないのである。

このように、第1部では、開拓地に痕跡を残そうとする人々の力よりも、自然の力の方が圧倒的であることが示されているが、そのような中で、モルモン教徒やインディアンが土地に残した跡にジムは関心を持つ。平原の中の「ひまわりに縁取られた道 (sunflower-bordered roads)」(21) は、迫害されたモ

ルモン教徒たちが、「自分達のやり方で神を信仰できる土地 (a place where they could worship God in their own way)」(21) を求めて「荒野 (the wilderness)」(21) へと入り、ユタ州へと移動する途中、種をまいていったためにできたのだという伝説を聞いたジムは、その道を「自由への道 (the roads to freedom)」(21) だと考える。ブラック・ホークの駅から祖父母の農場に向った時の土地の様子と、ピルグリム・ファーザーズの見たアメリカの描写との共通点は、先に指摘しておいたが、ここでも、自分たちの社会を建設しようと移動したという意味で、モルモン教徒たちとピルグリム・ファーザーズは、重ね合わせられている。また、ジムはインディアンたちがかつて馬に乗っていた跡が、「大きな輪 (a great circle)」(39) の形になって草地に残っているのを目撃する。土地を奪われ、移動させられたという意味では、インディアンとモルモン教徒の事情は異なるのだが、第1部では、風景には、ある集団が存在した跡が残ると感じる意識がジムに生じたことは明らかだろう。たとえ、自然の力に圧倒されて暮らしたとしても、人は、風景に跡を残すことができ、その跡とは、道 (the road) なのである。

### 3章 鉄道とジム

第2部から第4部にかけて、ジムが都市の方向へ向かうにつれて、物語の背景は、第1部の祖父母の家とその近所からより広い社会へと広がり、その社会の性質がより明らかにされていく。それで、風景の中に残された道よりは、人の手で作られた鉄道の方が、ジムの生活に重要な意味を持つことになる。

まず、第2部で、13歳のジムと祖父母がその北端の家に落ち着いたブラック・ホークは、家々の周囲には「白い塀と美しい緑色の庭 (white fences and good green yards)」(86) があり、「広く埃っぽい道 (wide, dusty streets)」(86) と「木造の歩道に沿って形のよい小さな木が生えている (shapely little trees growing along the wooden sidewalks)」(86) 「清潔でよく建設された小さな平原の町 (a clean, well-planted little prairie town)」(86) として紹介されている。町の中心部には、新しいレンガ造りの店と学校、裁判所、4つの教会、すなわち共同体が成り立つために必要な要素である商業、教育、法律、

宗教の場となる建物が建てられている。第1部の背景である開拓地とは対照的に、人の痕跡がすでに刻まれたいわば「荒野に建設された町」である。

このような町や都会における道は、「通り (streets)」と呼ばれている。「この間いつも僕は漂っていた (All this time, of course, I was drifting.)」(164)と述べられているように、ジムは、閉ざされた家々の中で行われている家庭生活に嫌悪を感じながら、第2部では、ブラック・ホークの「長く冷たい通り (those long, cold streets)」(126)を星明りの下であてもなくさまよう。第3部のリンカーンの「通り (the streets)」も「ブラック・ホークの通りとほとんど同じぐらい静かで重苦しいほど家庭的である (almost as quiet and oppressively domestic as those of Black Hawk)」(148)と否定的に述べられている。町や都会における道は、少年期から青年期にかけてのジムが、目的が定まらないまま歩く空間となっている。典型的なキャザーの登場人物は、路上にいることが多く、道は「挑戦、流動性、危険、可能性、過渡期的段階 (a space of challenge, flux, danger, possibility, and liminality) など様々な意味を持った空間」である (Lindemann 8) とされるが、この時期のジムにとって、道は、彼が成人する前に通過する過渡的な場なのだろう。第1部の道 (the road) が、自然との格闘の結果、人が大地に痕跡を残す過程を示すのに対して、第2部と第3部では、道 (streets) は、ジムがやってくる前にすでに存在しており、彼にとっては、つかの間、身を置く空間に過ぎない。「孤児 (an orphan)」(O'Brien 66) である彼は、家に落ち着くこともできず、人々が人工的に作り上げた通り (streets) に沿って、あてもなく歩き回るしかないのだ。

第2部から4部にかけての鉄道は、第1部に比べて、人々の生活とのより具体的な関わりが述べられており、鉄道を通じて外の世界から何がもたらされるかによって、肯定と否定の両面があることがうかがえる。肯定面として、鉄道は、小麦や家畜の商人で、西部への鉄道沿線のいくつかの町の穀物倉の管理をしているハーリング氏の成功と関係があり (Palmer 247)、ハーリング夫人の生活を快適にするためのピアノやその他の都会的で文明的な生活の道具を運んでくる (Meyering 63)。また、鉄道が、「西部の農民たちの孤独 (the

isolation of the western farmers) を終わらせる」(Meyering 63) 例としては、ブラック・ホークの町の広場に張られたダンス用の大テントがあげられる。「2台の荷馬車が、テントとペンキの塗られた柱を駅から運んでくるのを見た (I had seen two drays hauling the canvas and painted poles up from the depot.)」(112) とジムが述べている通り、単調な町の生活に刺戟を与え、若者たちの喜びとなったダンスは、鉄道によってもたらされたのである。さらに、鉄道の駅があるために、セールスマンたちが町に立ち寄り、彼らが宿泊するガードナー夫人 (Mrs Gardener) 経営のホテルにジムは出入りするようになる。シカゴで上演中のミュージカルの曲をピアノで弾くセールスマンや、キャンザス・シティからやってきたセールスマンを通じて、外の世界に触れることができるからである。

このような、鉄道を通じて町に入ってくる外の世界は、最初は、「体面のための体面 (the respect for respectability)」(116) を重んじる町の秩序におさまっているように見える。ある時、黒人のピアノ奏者ダーノルト (d'Arnault) が弾くワルツの曲を盗み聞き、ガードナー夫人経営のホテルで働く移民の娘タイニー (Tiny) と、タイニーの友人で、同じく移民の娘たちであるリーナ (Lena)、マリー (Mary)、アントニアは、少女たちだけで食堂でワルツを踊る。セールスマンの1人カークパトリック (Kirkpatrick) が、男たちと一緒に踊るように声をかけると、タイニーは驚いて、「あなた達がこちらにやってきて、私たちと踊れば、ガードナー夫人から怒られるでしょう。(She [Mrs Gardener]d be awful mad if you was to come out here and dance with us.)」(110) と、男女と一緒に踊るという提案に抗議する。

また、ダンス用の大テントが町の広場に張られ、町の親が子供たちを午後のダンスの練習に行かせはじめた時、次の文章が示す通り、テントの主催者は町議会に決められた時間を守る。さらに、主催者の夫人が合図をして、ハーブが『ホーム、スイートホーム』を演奏すると、ブラック・ホークの人々には時間が10時だとわかり、円形機関車庫の笛と同じくらい信頼して、その曲で時計を合わせることができたと述べられている。

The Vannis kept exemplary order, and closed every evening at the hour

suggested by the city council. When Mrs Vanni gave the signal, and the harp struck up "Home, Sweet Home", all Black Hawk knew it was ten o'clock. You could set your watch by that tune as confidently as by the roundhouse whistle. (113)

アメリカにおける鉄道の発展は、1870年から1880年のあいだに、標準時の数を30ぐらいまでに減少させ、標準時が「労働や公的生活を規制する新しいモデルをさしだした」(オマリー 97)と言われるように、広い国土における時間の統一にも重要な役割を果たした。鉄道によって運ばれてきたテントの主催者が、町議会に決められた時間に従い、主催者の時間の合図によって、今度は町の人々の生活が秩序づけられるという仕組みは、鉄道が人々の生活における秩序の下におさまっているだけでなく、秩序を維持する側にも立つようになったことを表わしていると考えていいだろう。

ホテルの場面では、ダーノルトが激しく弾き始めたダンス音楽に動かされたかのように、タイニーたちはその場にいる男たちと踊り始める。この時、1人とり残されたアントニアは、その様子を最初は「ぎょっとして (frightened)」から「いぶかしげに (questioningly)」(111) 眺める。男女が一緒に踊ってはならないという慣習が破れた瞬間であるが、アントニアはまだ慣習を守る側にいる。

同じように、ダンスのテントは、本来は別々の場で生活をするべきとされる、町の青年たちと移民の娘たちを「同じ立場 (neutral ground)」(117) に置くことによって、「体面のための体面 (the respect for respectability)」(116) を何よりも重視する町の秩序を脅かし、移民の娘たちは「社会秩序への脅威 (a menace to the social order)」(116) と考えられるようになる。ダンスを通じて移民の娘たちの魅力を発見した青年たちが、彼女たちとワルツを踊るためにテントに通うようになったからである。ついに、父の銀行で支配人を務める青年シルベスターが、リーナとダンスを繰り返すのを見て、ジムは、2人の結婚を期待するまでになるのだが、結局、シルベスターが6歳年上の未亡人とはいえ、自分と同じ身分の女性と駆け落ちすることによって、町の青年と移民の娘たちとを隔てる町の秩序は守られる。

ここまでは、鉄道の肯定と否定の両面が述べられているが、この後は鉄道の否定面が、アントニアを中心にした物語の中で明らかに強調されていく。それは、評判の悪い金貸しのウィック・カッター (Wick Cutter) によるアントニアに対するレイプ未遂事件で始まる。鉄道が持ち込んだダンスに夢中になったアントニアは、ダンスを禁じられると、ハーリング家を飛び出しカッターの家で働くことになる。夫婦で数日間の旅に出かける間、必ず家で寝泊りするようアントニアに言いつけたカッターは、旅の途中で、ブラック・ホークに停車しない特急列車に妻を1人で乗せて、家から遠ざける一方で、1人で帰宅、アントニアが寝ているはずの部屋に忍び込む。彼女の代わりにそこで寝ていたジムとカッターの格闘で、この場面は決着がつくのだが、鉄道は悪用され得ること、同時に、10代後半のアントニアの「移民であり、女性であるための傷つきやすさ (her vulnerability as an immigrant and woman)」(Palmer 247) がここで示されている。

さらに、この後アントニアを妊娠させた上で捨て、人々の「哀れみの対象 (an object of pity)」(171) としたのは、「女たらし (a kind of professional ladies' man)」(128) という評判のある車掌ラリー・ドノバン (Larry Donovan) であった。第4部では、ロー・スクール入学前に帰郷したジムが、その前後の事情を、彼女に同情を寄せるスティーブズ未亡人 (the Widow Steavens) から聞き、本人との数年ぶりの再会を果たす。結婚するつもりで、300ドルと3個のトランクを持って、夜汽車で恋人の待つデンバーに向かったアントニアは、所持金がなくなると彼に捨てられたのだという。アントニアが到着した時には、料金着服のために、ラリーは解雇されていた。次の文章が示すように、その後の彼は、今度はオールド・メキシコに場所を変え、住民と鉄道会社を相手に金儲けのための不正を続けるであろうと、アントニアは推測する。鉄道の否定的な面は、アメリカの外までも広がっていくのである。

I guess he's gone to Old Mexico. The conductors get rich down there, collecting half-fares off the natives and robbing the company. He was always talking about fellows who had got ahead that way. (179)

人々の日常生活に侵入するにつれて、鉄道は、黒人用車両や労働者ストライキ、

事故による死傷など、「文化的矛盾 (the culture's contradictions)」を反映するようになったことが指摘されるが (Schlereth 23)、最初の大陸横断鉄道からして、「鉄道労働者の血と汗、政治的駆け引きと盗み (blood, sweat, politics and thievery) によって建設された」(Zinn 248) のだから、鉄道は最初から二面性を持っていたと言える

以上のように、ジムの10代の内のおよそ数年間を扱う、第2部から第4部にかけては、特にアントニアを中心とする物語の中で、鉄道の肯定的な面よりも否定的な面が明らかにされていく。第1部冒頭、ネブラスカ州への汽車の旅で世話をしてもらった車掌は、カフスボタンにさえ「象形文字 (hieroglyphics)」(7) が刻まれ、彼自体が「古代エジプトのオベリスク (an Egyptian obelisk)」(7) よりももっと多くのことが書き込まれている、謎めいた存在のように、10歳のジムには思われた。しかし、その文字の意味を解き明かしてみると、子供の時のジムが出会った親切な車掌と、アントニアを捨てた車掌とは、一見対照的ではあるが、ひとつの物の両面にすぎないのである。

このように鉄道の否定面が明らかになったのに、成人したジムはなぜ鉄道に関わる仕事につくのだろうか。その理由は具体的に説明されていないが、第2部から第4部にかけても、人々と土地との結びつきへの注目が繰り返されている。モルモン教徒やインディアンという自分たち以外の集団ではなく、ジム自身と土地との結びつきの強さがはっきりと意識されるのである。

そのひとつは、第2部14章の移民の娘達との遠足の場面で、紹介されている。遠足も終りに近づいた時、ジム達は目の前に突然現れた「奇妙なもの (a curious thing)」(139) に気づく。それは、夕日の表面に現れた「大きな黒い姿 (a great black figure)」(139) で、「太陽に描かれた雄大な大きさの絵 (heroic in size, a picture writing on the sun)」(140) に見えるが、夕日が沈んでしまうと等身大の大きさに戻ってしまい、平原のどこかに「置き忘れられた鋤 (that forgotten plough)」(140) であることがわかる。この作品のテーマを「アメリカの失われた夢」と見る Miller は、夕日が沈むと鋤が元の大きさに戻ったことに注目し、この場面がフロンティア開拓の「理想の消失 (the disappearance of the vision)」(Miller 101) を示すととらえている。フロン

ティア・ラインの消滅が1890年とされていることを考えると、Millerの解釈は妥当だが、ジムにとっては、やはり、この鋤は「西漸運動 (the Westward Movement) の象徴」(Woodress 296) であり、西部が農民たちによって開拓されてきたことの証であると思われる。第1部では、モルモン教徒やインディアンがその土地に残した跡に、ジムは注目していたが、この場面では、土地に跡を残したのは、彼の周囲で暮らす祖父母や移民たちなど、より身近な人々であったことが示されている。

さらに、第3部では、自分が育った土地への愛着と、「ミューズを自分の国にもたらず最初の人間になろう (...I shall be the first, if I live, to bring the Muse into my country.)」(150) という、自分から土地のために働きかけようという気持ちを、ジムは強く意識する。次に述べられるように、大学で学ぶラテン文学の魅力に引きつけられる時も、ジムが思うのは、自分が知っている人々や土地であり、それらの姿は夕日を背にした鋤のようにくっきりと浮かび、彼の心をとらえるのである。

Mental excitement was apt to send me with a rush back to my own naked land and the figures scattered upon it. While I was in the very act of yearning toward the new forms that Cleric brought up before me, my mind plunged away from me, and I suddenly found myself thinking of the places and people of my own infinitesimal past. They stood out strengthened and simplified now, like the image of the plough against the sun. They were all had for an answer to the new appeal. (149)

ジムのこのような土地への愛着が、鉄道による土地の発展に大きな役割を果たしたことを、「イントロダクション」の中の「わたし」は、「彼は自分の鉄道が走り、広がっている偉大な土地を個人的な情熱で愛している。それへの彼の信頼と知識とが、その発展に重要な役割を果たしてきたのだ (He loves with a personal passion the great country through which his railway runs and branches. His faith in it and his knowledge of it have played an important part in its development.)」(3) と指摘している。「わたし」の指摘を参考に

すれば、ジムが鉄道会社の顧問弁護士になった理由は、様々な人の手によって開拓されてきた土地への愛情のために、さらにその土地を発展させ、自分達の跡を残すために、ということだろう。一方で、時代が下り、銀行家によって鉄道財政の支配が強化されるようになると、銀行家たちはより大きな安定すなわち「盗みよりは法律による利益 (profit by law rather than by theft) を望んだ」(Zinn 249) と述べられる通り、鉄道による利益を得るために法律が利用されるようになったことを考えると、ジムの理想と現実とは大きな隔たりがあったことが推測できる。しかし、「理想と現実が矛盾する時、ジムは現実を拒絶する (...; when they [his ideas] conflict with reality, he denied the reality.)」(Rosowski 89) ので、彼の回想の中では、そのような現実には触れられていない。ただ、ロー・スクール入学前の第4部と、大家族の母親となったアントニアとの再会の場面を扱う第5部との間に、20年間の空白が置かれているだけである。

#### 4章 ジムとアントニア

最後の第5部では、第4部から20年間が経過した後、ジムを初めとする、成人後、ネブラスカ州からよその土地へと移り住んだ人々と、アントニアとの対照が強調されている。第5部の冒頭では、アントニアと同じ移民の娘だったタイニーが、アラスカでの金鉱発見を利用して金儲けをし、洋裁師として成功したリーナを呼び寄せて、サンフランシスコで共に暮らしていることが紹介されている。先に述べた通り、ジムはニューヨークに住まいを構え、仕事のために度々、西部を訪れたり、サンフランシスコでタイニーとリーナに再会したり、アントニアの故郷プラハからアントニアに絵葉書を送ったり、と国内外を移動する生活である。

それに対して、クザック (Cuzak) という男性と結婚し、夫とたくさんの子供に囲まれたアントニアは、開拓地にしっかりと根付いている。20年ぶりに再会したアントニアが、「頑丈で、茶色の肌をした女性で、胸は平たく、カールした茶色の髪の毛は少し灰色になっている (a stalwart, brown woman, flat-chested, her curly brown hair a little grizzled)」(189) 姿であることに、

ジムは最初、ショックを感じるが、開拓地での厳しかった少女時代を克服したことが、彼女が今使っている「白い床の大きく明るい台所 (a big, light kitchen with a white floor)」(189) や、大家族のための大量の保存食の「貯蔵庫 (new fruit cave)」(192)、草しか生えていなかった土地に植えられた木々によって示されている。生活が落ち着くまでの労働の過酷さの結果、彼女の肌は「とても茶色で硬く (so brown and hardened)」(191) と木の皮を連想させるが、このような描写は、彼女自身が、木のようにその土地に根付いたことを強調していると考えられる。

子供のいないジムやタイニー、リーナに対して、アントニアがたくさんの子供を生み出した母親すなわち「昔の民族の創設者のように、豊かな命の源 (a rich mine of life, like the founders of early races)」(200) で、その命が受け継がれていくこともはっきりと述べられている。第5部の背景は、作物の実る秋であるし、復活祭の日に生まれた息子レオ (Leo) の弾くバイオリンは、レオの祖父シメルダ氏愛用のバイオリンである。何よりも、少女時代のアントニアが家族と暮らしていた住まいは「洞窟 (the cave)」(45) と呼ばれていたが、「食料貯蔵庫 (new fruit cave) から彼女の息子たちが出てくる様子は、「暗い洞窟から日の光に向かっての紛れもない命の爆発 (a veritable explosion of life out of the dark cave into the sunlight)」(193) と今のジムには感じられるのである。その住まいを初めとする生活の不自由さがシメルダ氏の自殺の原因であったとすれば、この場面は、穴 (the cave) が死ではなく生を生み出した転換の瞬間として、強い印象を与える。

『私のアントニア』の最後の部分で、ジムとアントニアの対照がこのように強調されているのは、単に、ジムの生き方を否定し、アントニアの生き方を肯定するためではないと思われる。アントニアの夫クザックが「最初は寂しさで気がおかしくなりそうだった (At first I near go crazy with lonesomeness.)」(208) と述べる通り、「これは確かに素晴らしい生活だが、クザックが望んでいたような生活ではない (This was a fine life, certainly, but it wasn't the kind of life he had wanted to live.)」(208) と、彼らの生活が夫と妻の両方に適しているわけではないとジムは考える。彼が考えるように、クザックが「ア

ントニアの特別な使命の道具 (the instrument of Antonia's special mission) (208) なら、アントニアの夫婦生活は完全に肯定的に描かれているとは言えないだろう。

2人の生き方を対照的に描いた作者の意図は、むしろ、19世紀末から20世紀初めにかけてのアメリカがどのようにして作られていったか、どのように開拓されて今のような姿になったかを、両面から語ることだったと思われる。「移住と定着の相克 (a dialectic between migration and settlement)」がアメリカの歴史を特徴づけると考える Urgo は、アメリカ文学の歴史も「定着と移住の相互作用 (the interplay of rootedness and migrancy, settlement and escape)」を反映していると述べ (Urgo 1)、キャザーの作品を2つの要素から分析している。移住と定着という2つの要素を、ジムとアントニアのそれぞれにあてはめれば、『私のアントニア』は、過去を共有しながらも、それぞれ異なる方法でアメリカを作った経験についての物語として読むことができる。ジムは鉄道によって、アントニアは開拓によって、アメリカの土地を自分のものとしていくのである。ネブラスカ州から出ていったジムの人生は直線を描き、結婚できないままデンバーから戻ってきたアントニアの人生は円を描いている。このように、ビジネスと家庭、青い目と茶色の目、男と女と、2人が対照的でありつづけなければならなかったことが、ジムがアントニアに向かって、「君に恋人か、妻か、母親か、姉妹になってもらいたかった (I'd have liked to have you for a sweetheart, or a wife, or my mother or my sister....)」(183) と言いながらも、2人の人生が親密に交わることのなかった理由であろう。

第5部の最後で、ジムはブラック・ホークの北端の土地を歩きまわる。起伏が激しいために耕されることなく、昔の赤い草が生えたままの土地の一角で、ジムは「あの古い道 (that old road)」(209) を見つける。農場用の荷馬車の車輪の跡が消えていない道を見て、これは、アントニアと自分とが駅から向かった道であろうと彼は考える。「アントニアと私にとって、これは運命の道だったのだ (For Antonia and for me, this had been the road of Destiny.)」(210) と過去をなつかしむジムの感慨で、『私のアントニア』は終わる。しかし、アントニアの娘マーサ (Martha) の夫が「フォード車 (a Ford car)」(201)

を所有していることからわかるように、すでに自動車が出現し、アメリカはまた次の時代に向かおうとしているのである。

### 引用文献

- Bradford, William. "From *Of Plymouth Plantation*." *The Norton Anthology of American Literature*. Ed. Ronald Gottesman et al. Vol.1. New York and London: Norton, 1979.
- Cather, Willa. *My Antonia*. Vermont: Tuttle, 1996.
- Gelfant, Blanche H. "The Forgotten Reaping-Hook: Sex in *My Antonia*." *Willa Cather's My Antonia*. Ed. Harold Bloom. NY and Philadelphia: Chelsea House, 1987.
- Lindemann, Marilee. "Introduction." *The Cambridge Companion to Willa Cather*. Ed. Marilee Lindemann. Cambridge and New York: Cambridge University Press, 2005.
- Marx, Leo. *The Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Ideal in America*. London: Oxford University Press, 1967.
- Meyering, Sheryl L. *Understanding O Pioneers! and My Antonia: A Student Casebook to Issues, Sources, and Historical Documents*. Westport, Connecticut & London: Greenwood Press, 2002.
- Miller, James E. Jr. "My Antonia and the American Dream." *Willa Cather's My Antonia*. Ed. Harold Bloom. NY and Philadelphia: Chelsea House, 1987.
- O'Brien, Sharon. *Willa Cather: The Emerging Voice*. New York and Oxford: Oxford University Press, 1987.
- Palmer, Scott, "'The Train of Thought': Classed Travel and Nationality in Willa Cather's *My Antonia*." *Studies in American Fiction* 29(2001): 239-250.
- Rosowski, Susan J. *The Voyage Perilous: Willa Cather's Romanticism*. Lincoln & London: University of Nebraska Press, 1986.
- Schlereth, Thomas J. *Victorian America: Transformations in Everyday Life: 1876-1915*. New York: Harper Perennial, 1992.
- Skaggs, Merrill Maguire. "Introduction." *Willa Cather's New York: New Essays on Cather in the City*. Ed. Merrill Maguire Skaggs. Madison and Teaneck: Fairleigh Dickinson University Press, 2000.
- Stout, Janis P. *Willa Cather: The Writer and Her World*. Charlottesville and London: University of Virginia Press, 2000.
- Urgo, Joseph R. *Willa Cather and the Myth of American Migration*. Urbana & Chicago: University of Illinois Press, 1995.

Whitman, *Walt. Leaves of Grass*. Ed. Sculley Bradley. New York and London: Norton, 1973.

Woodress, James. *Willa Cather: A Literary Life*. Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1987.

Zinn, Howard. *A People's History of the United States*. New York: Harper Perennial, 1990.

マイケル・オマリー『時計と人間—アメリカの時間の歴史—』晶文社、1994年。

W. シヴェルプシュ『鉄道旅行の歴史』法政大学出版局、1982年。